

体験談①

満州からの引き揚げ

福岡 通子(78歳)

私は、昭和18年9月に当時満州といわれた今の中国の通化で生まれました。父と母は長野県の人で、父は果樹農家の四男で、満州の営林省で働いていました。昭和19年、父は入隊することになりました。父と母は相談して、すぐに日本に帰ることに致しました。

この決心が私達の生きのびる大事なことでした。

母は私の兄と姉、私をつれて、なにもかもおいて日本に向かうと決めました。

家で働いていた満州の人に船に乗るところまで送ってもらい、港に着いた時はやれやれと、持っていた食料をその人に全部あげてしまいました。でも、その船は食べ物がなく全部自分達で持ってきた物だけで、まかなわないといけませんでした。他の人に分けてもらったり大変だったそうです。日本の港に着いた時は本当にうれしかったのですが、すぐに下船出来ず、二日間待たされたそうです。

やっと日本に上陸し汽車に乗り込み長野県松本市におかいました。しかし汽車の中で母子はお腹がすいてすいて仕方なく途中の駅でおり、見しらぬとある農家に声をかけました。その農家のおよめさんが、「では駅で待っていて下さいね」と言ってくれたので、親子4人駅のベンチで待っていますと、その女の人がしばらくして来てくれました。手には包みを持って!それは大きな塩むすび3つでした。母はとてもおいしく、子供達もとてもよろこんで食べさせてもらいすごくうれしかったことを話してくれました。

そして、私達は、無事帰ることができました。